

## やみの中から呼び出された光

【聖書箇所】創世記 1 章 1～3 節、Ⅱコリント 4 章 6 節

### ベレーシート

●今回からしばらくの間(5～6回の予定)、聖書のいう「光」の概念、その意味するところについて、シリーズとして学んでいきたいと思えます。このシリーズをすることになったのは神の導きです。これまで、旧約の預言者たち、またイエシュアや使徒パウロが宣べ伝えた「御国の福音」、また「キリストの再臨」、「キリストの花嫁」という概念はみなひとつにつながっており、それらを理解することは、神のご計画全体を鳥瞰する上できわめて重要な鍵だということを学んできました。使徒パウロは夫と妻の在り方を教える場合でも、必ずそのかわりを規定する原点にまでさかのぼって考えるという、いわば原点思考を持った人でした。その彼がしばしば「奥義」ということばを使っているのです。「奥義」とは、本来、神のうちにあったものが長い間隠されてきたことを意味します。パウロという人は、例えば、人が男と女とに造られたという事実、その男と女が結婚して一体となるという神の教えの中に、実は、とても深い神の意図やご計画が隠されていたことを発見したのです。つまり、彼は「すべての事の始まり」、「一つひとつのことがどこを起点として始まったのか」ということを見出そうとしていた人であったと思えます。

●キリスト教の歴史の中でさまざまな混乱や逸脱の中で、そうした原点思考を持った改革運動がなされてきました。神の教会改革運動も多くの教派や分派を生み出していた 1900 年前後のアメリカで、真の神の教会とは何かということ聖書に帰って、新約聖書に記されている教会の姿を手本としてそこに立ち返ろうとした運動です。それからすでに百年以上経っていますが、これからの教会の在り方や歩みを考える時、使徒パウロのように原点に戻って考えることは有益だと信じます。連盟の「次世代育成プロジェクト」においても、次世代のためというよりも、これから今ある教会がどこに起点をおいて歩むべきかがまず問われているのです。どこを起点において、何を最も重要なこととして物事を考えて行くべきか、そこが見えて初めて具体的なプログラムを建てるができると思えます。私が連盟の国内宣教委員会の責任者となっているからそのことを考えなければならないというわけではありません。おそらく、そうした役割が与えられていなかったとしても、常に、原点からものごとを考えて行く必要があると信じます。「はじまりと終わり」、「アルファとオメガ」を見据えることはそうたやすいことではありませんが、そのことに目が開かれるならば、「決勝点がどこかわからないような走り方」や「空を打つような拳闘」をしなくて済むと考えます(Ⅰコリント 9:26)。

●そこで、なぜパウロが神の「奥義」に目が開かれたのかと言えば、その鍵が「光」にあるように思うのです。この「光」は創世記 1 章 3 節にある「光」です。イエシュアの語られた「天の御国の奥義」を悟るためにも、この「光」の意味するところ(概念)は何なのかを探り求めて行きたいと思えます。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

●そこで早速ですが、質問です。神の創造において最初に造られたのは「光」であるという言い方は、正解でしょうか、それとも不正解でしょうか。説教のタイトルである「やみの中から呼び出された光」とあることから判断して、後者の不正解だと思われる方もおられるかもしれませんが、実は、その答えは正解でもあり、不正解でもあるのです。その理由を今回のメッセージの中で触れたいと思います。

●ところで、「光」を表わすヘブル語は「オール」(אור)、新約のギリシア語では「フォース」(φῶς)です。旧約の「オール」は名詞で 200 回、一方、ギリシア語の「フォース」は 74 回です。ところで、「光」という言葉を聞いて、すぐに思い起こす聖句は何でしょうか。いくつか有名な箇所を挙げてみましょう。

- ①「わたしは、世の光です。」(ヨハネの福音書 8:12, 9:5)
- ②「あなたがたは、世界の光です。」(マタイ 5:14)
- ③「ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼(サウロ)を巡り照らした。」
- ④「以前は暗やみでしたが、今は、主にあつて、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(エペソ 5:8)
- ⑤「神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。」(Iヨハネ 1:5)
- ⑥「すべての良い贈り物・・・は上から来るのであつて、光を造られた父から下るのです。」(ヤコブ 1:17)
- ⑦「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(詩篇 119:105)

●上記のように聖句をいくつか並べてみましたが、実はこれだけで聖書が意味する「光」の概念を説明することはできません。「世の光」とはどういうことか。「天からの光」とは・・・、「光の子ども」とはどういうことか、「神が光である」と語られているにもかかわらず、その神が「光を造られた」とはどういうことか。何となく分かるようで分からない、これが「光」のもっている特質です。なぜ分からないのか一言でいうならば、神の「光」は目に見えないからです。それゆえ人はこの光が理解できず、そのために拒絶する(憎む)のです。そこで今回は、この「光」に照らされた一人の人物、サウロ(後の使徒パウロ)を取り上げ、彼がこの「光」をどのように解釈し、理解したのかを取り上げてみたいと思います。これを知るためには、パウロの回心の出来事と、彼が諸教会に書き送った手紙の中から見出さなくてはなりません。その考察のプロセスとして、使徒の働きで三度も記されているパウロの回心の記事を最初に取り上げ、その「光」にふれた彼がどのように変えられたのか。そしてその「光」を彼がどのように理解したのか、という点を取り上げたいと思います。

## 1. 突然、パウロ(サウロ)を照らした「天からの光」

●使徒の働きに記されているパウロの回心の記事はそれぞれ微妙に異なっていますが、三回(9:1~19、22:3~21、26:9~18)も記されています。聖書には「三」という数が驚くほど多く使われています。「三度」「三日目」「三日間」など、また今回のように「三」という直接的な数として記されていないとしても、「あかし」の記事が三回も置かれているのは、「神による完全な取り扱いの確証」を意味しています。パウロは自分に対する神の恵みのあかしとして、いつでも、どこでも、自分に起こったあかしをしたはずで、パウロ

は他の使徒たちと異なり、歴史上のイエシュアと共に過ごした事はありません。しかし、この「天からの光」の経験こそが、人に自分の使徒性を主張できたのです(ガラテヤ 1:1)。

●サウロ(=「シャーウール」 **שאול** は「神を熱心に尋ね求める者」の意)、つまり、後の使徒パウロ(=「パウロス」 **Παῦλος** はラテン語で「小さい」の意)は、ダマスコへの途上で突然「天からの光」に照らされました。彼は地に倒れ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いたのでした。「主よ。あなたはどなたですか。」と尋ねると、「わたしはあなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずですよ。」という主の声を聞いたのです。彼は「天からの光」によって目が見えなくなりました。三日の間、暗闇の中で、また一切の飲食も絶って、彼は自分に起こった出来事を考え巡らしていたことと思います。そして三日目に、主から遣わされたアナニヤというクリスチャンが訪ねてきて、サウロの頭に手を置いて祈った時、彼の目からうるこのようなものが落ちて、目が見えるようになったのでした。

●「目が見えるようになった」というのは、単に肉体的な視力が回復したことだけを意味しません。彼が迫害してきたイエシュアこそ、キリスト(メシア)であるということ論証できるほどに、彼の霊の目が開かれたことを意味します。言い換えるなら、キリストにある神のご計画(みこころ、御旨、目的)のすべてが、彼のうちにおいて整理し直されたことを意味します。たとえ三日間でも、それは私たちの何十年分に相当する経験であったかもしれません。驚くべきことは、その三日間の経験がダマスコに住むユダヤ人たちをうるたえさせるほどであったということです。何が彼をそのように変えたのでしょうか。それは「天からの光」です。この「天からの光」が、神によってすでに定められている永遠のご計画を、彼のうちに理解させ、悟らせる「啓示の光」であったのです。

●サウロを照らした「天からの光」は「シャハイナ・グローリー」という特別な光で、文字通り、「太陽よりも明るく輝く光」として見たサウロと、彼に同伴した者たちはみな地に倒れました。しかし、その光によって目が見えなくなり、しかもその光の中から主の声を聞いたのはサウロただ一人だけでした。どんな声を彼は聞いたのでしょうか。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」(9:4)。これは彼が聞いた始めの部分で、その後も主の声は続いていました。「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」(使徒 26:14)と。その後も主の声は続いてパウロのこれから果たすべき使命が語られます。パウロが経験した「天からの光」はまさに「天からの啓示」だったので。「啓示」とは神のご計画が特別に開かれ、示されることです。

●後に使徒パウロはこの光を「キリストの栄光にかかわる福音の光」だとし、『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださった」と述べています(Ⅱコリント 4:4, 6)。「福音の光」と「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識」とは同義です。つまり「天からの光」なしに、福音を理解することはできないということです。ですから、「天からの光」は「人に悟りを与えて人を輝かす光」であり、神との生きたかかわりをもたらす「いのちの光」とも言えるのです(ヨハネ 1:4)。

## 2. パウロが理解した「光」の概念

●ここで注目したいことは、Ⅱコリントの4章6節で、パウロが創世記1章3節のことばを解釈(ミドゥラーシュ)して、『**光が、やみの中から輝き出よ。**』と**言われた神**』と表現していることです。パウロが聖書のみことばを引用するときは決まって、当時、すでにギリシア語で翻訳されていた七十人訳(LXX)聖書からです。彼はユダヤ教のすぐれたラビでもあったわけですから、当然、ヘブル語で書かれたものも暗記していたはずで、そのヘブル語で書かれた創世記1章3節は、以下のように記されています(ヘブル語は右から、「ヴァッヨーム・エローヒム・イエヒー・オール・ヴァイエヒー・オール」と読みます)。

### ①ヘブル語聖書

オール ヴァイエヒー オール イエヒー エローヒム ヴァッヨーム

וַיִּמְרָא אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי־אוֹר

光があった すると 「光あれ」 神は 言われた そのとき

### ②七十人訳(LXX) (左から右へ)

カイ エイベン ホ セオス グネーセートオー フォース カイ エグネト フォース

καὶ εἶπεν ὁ θεός γενηθήτω φῶς καὶ ἐγένετο φῶς

And said God Let there be light and there was light.

### ③新改訳聖書

新改訳第2版 そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

新改訳改訂3版 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

●新改訳聖書は、第2版から第3版に改訂するに当たり、ある一部分が修正されたということではないのです。1章1節と2章1節の2つの節を除く、1～2章のすべての節の訳が改訂されているのです。それだけの分量が改訂されるということは大事(おおごと)です。そのために「第3版」という言葉の前にわざわざ「改訂」の文字を入れているほどです。それは改訂前の神の創造についての見方(視点)が一新されたことを物語っています。したがって新改訳聖書で読んでおられる方は、創世記1章、2章を学ぶには改訂第3版を買う必要があります。金縁の皮表紙だからと言って、第1版や第2版をいつまでも後生大事に使ってはい時代を乗り遅れてしまいます。どの部分がどのように訳し直されたのかを興味をもって読む必要があります。また、それをヘブル語原文で確かめることができるならば、かえってより多くのことを学ぶことにもなり、多くの益を得られると信じます。

●ちなみに、創世記において「光」という言葉が使われているのは、わずか第1章(3,3,4,4,5,18)の6回です。3節の『「光があれ。」すると光はあった』(新改訳改訂3版)の「光」の持つ概念について、これから

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

「シリーズ」として学んで行きたいと思いますが、現段階では5~6回の予定です。この「光」について学ぶことは、これまで学んできた「御国の福音」、「キリストの花嫁」という鍵と共に、神のご計画全体をより深く理解することになると信じます。

●さて創世記 1 章 3 節に戻りましょう。新改訳聖書第二版の「光よ。あれ。」が、改訂 3 版では「光があれ。」となり、第二版の「すると光ができた」という表現が、改訂 3 版では「すると光があった」と変更されています。第二版の「すると光ができた」という訳が、改訂 3 版では、「できた」が「あった」に改変されたのです。口語訳も新共同訳も「あった」と訳していますが、一体何が問題なのでしょう。ちなみに、NKJV では there was、TEV は light appeared とあり、「光が現われた」と訳しています。

●この箇所を、II コリント 4 章 6 節で、使徒パウロは以下のように解釈して記しているのです。

ホティ ホ セオス ホ エイポーン      エク スコトウース フォース ラムプセイ  
ὅτι ὁ θεὸς ὁ εἰπών,      Ἐκ σκότους φῶς λάμπει,  
というのは 神は 言われたところの      「やみから 光が 輝き出よ」  
(やみの中から)

●パウロは創世記 1 章 3 節のみことばをそのままではなく、解釈して語っています。特に、「やみの中から光が輝き出よ」というのは、神はすでにあった光を、やみの中から呼び出しているからです。これは神がことばをもって命令したことによって、そのときはじめて光が創造されたのではないことを示しています。私は長い間、神が「光よ。あれ」と命じて最初に創造されたものは「光」であると考えていましたが、そうではないということに気づきました。自分の「理解の型紙」が破れるというのはこういうことです。ただし、本来、存在していた光が呼び出されて、「天と地」という舞台上に登場させられたとしても、聖書はそのことを神が「創造した」(「バーラー」 אֱלֹהִים)と表現しているのです。天と地のすべての被造物とそのかわりのすべてが、最初の「光」の中に包まれるようにして存在しています。以下に見られる「大空」も「水」も「かわいた所」などもみな、神の命令(文法的な命令形)によってではなく、神に呼び出されているのです。文法的にはそのことがすべて動詞未完了形の 3 人称の指示形によって表されています。

①6 節の「大空が水の真ただ中に**あれ**。水と水との間に区別が**あれ**。」の「あれ」

②9 節の「天の下の水が一所に**集まれ**。かわいた所が**現れよ**。」の「集まれ」(受動)、「現れよ」(受動)

③11 節の「地が植物、・・・を、種類にしたがって、地の上に**芽生えさせよ**。」の「芽生えさせよ」(使役)

④14 節の「**あり**」

⑤20 節の「**群がれ**」

⑤同節「**飛べ**」

●「～があれ」、「～せよ」は一見、命令形のように見えます。しかしそれは、本来、神が計画していたものが、目に見える形となって「**現われるように**」というのが、未完了指示形が意味していることです。これも

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

聖書は「創造する」という動詞で表わすのですが、全く何も無い無から有を生じさせるような「創造」とは意を異にしているのです。

●ちなみに、動詞の命令形が聖書ではじめて登場するのは、神が地の上に登場させたもの(者)に対してです。命令形には、命じる対象が不可欠です。ですから、神は地上や海や空に住む生き物に対して、「産めよ」「増えよ」「満ちよ」と命じ、同じく人に対しても、「産めよ」「増えよ」「満ちよ」と命じており、特に、人の場合はさらに「地を従わせよ」という命令を付け加えています。このように、神の「呼び出し」(未完了指示形)と被造物に対する「命令」(命令形)を含めた経緯全体を、神は「天と地を創造された」(1:1、2:1)と聖書は記しているのです。

●こうした文法情報から分かるように、神の「天と地の創造」は、神が「～するように」という本来あった神のご計画に沿って成されているということです。こうした理解は、パウロがⅡコリントの4章6節で、パウロが創世記1章3節を解釈(ミドウラーシュ)して、『「光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神」と表現した箇所のみならず、パウロの他の手紙の中にも随所に表れています。特に、エペソ書1章はまさにそうです。そこには「光」ということばがなくとも、それが他のことばによって表現されているのです。

●このことを知るために、エペソ人への手紙の1章1～14節を取り上げてみたいと思います。この箇所はパウロが神の栄光をほめたたえる賛美の源泉について極めて簡潔に記した驚くべき箇所、主にある「成熟した者」たち向けのテキスト(いわば、「堅い食物」)だと言えます。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙1章1～14節

- ① †のある箇所は第3版で改訂された部分です。( )内は私の説明です。
- ② この手紙にある「**聖徒たち**」「**私たち**」「**あなたがた**」とは、「教会」(=キリストの花嫁)と同義です。
- ③ **黄色のマーカー**は、神の永遠のご計画と意志決定を表わす語彙で、「**みこころ**」「**みむね**」「**ご計画**」「**目的**」といった語彙が含まれます。

1 神の**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$ )による**キリスト・イエス**の使徒パウロから、**キリスト・イエス**にある忠実なエペソの聖徒たちへ。

2 私たちの父なる神と**主イエス・キリスト**から、恵みと平安が**あなたがた**の上にありますように。

† 3 私たちの**主イエス・キリスト**の父なる神がほめたたえられますように。神は**キリスト**にあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

† 4 すなわち、神は私たちを**世界の基の置かれる前から彼にあって**選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

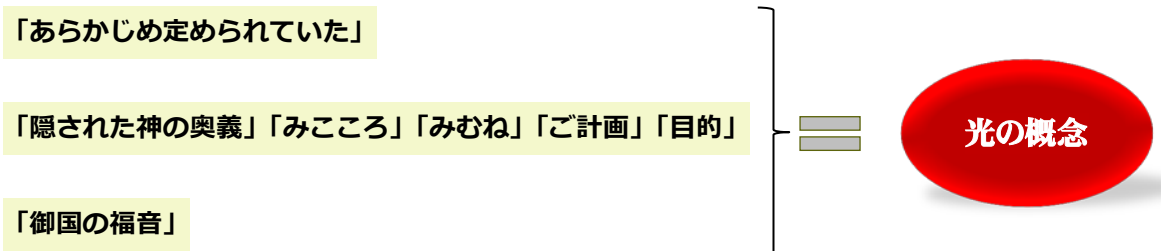
† 5 神は、**みむね**(「ユードキア」 $\epsilon\upsilon\delta\omicron\kappa\iota\alpha$ )と**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$ )のままに、私たちを**イエス・キリスト**によってご自分の子(=「養子」、しかし花嫁であれば父から見て子の立場にある)にしよ

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

- うと、愛をもってあらかじめ定められました(「プロオリゾー」 προορίζω)。
- +6 それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
- +7 この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- +8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、
- +9 **みこころ**の奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、この方において神があらかじめお立てになった(発案してくださった=「プロティセマイ」 προτίθεμαι)**みむね**(「ユードキア」 εὐδοκία)によることであり、
- +10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにおいて、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。
- +11 この方において私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。**みこころ**により**ご計画**(「プロセシス」 πρόθεσις)のままをみな行う方の**目的**(=意志「ブーレー」 βουλή)に従って、私たちはあらかじめこのように定められていた(「プロオリゾー」 προορίζω)のです。
- +12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。
- +13 この方においてあなたがたもまた、真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。
- +14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐこと(=相続財産)の保証(=手付金)です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。



●ここには重要なことばが数多くあります。その中で最も重要なのは「**あらかじめ定められていた**」(=**世界の基が置かれる前から**)というフレーズです。「あらかじめ定められていた」と訳された「プロオリゾー」(προορίζω)は新約聖書で6回(使徒4:28、ローマ8:29,30、Iコリント2:7、エペソ1:5,11)だけですが、当然ながら、すべて時制はアオリスト(過去)です。目を通しておくべき重要な箇所です。



●ところで、何が「あらかじめ定められていたのか」と言えば、それは神の「みこころ」として、神の「みむね」として、神の「ご計画」として、神の「目的」として定められていた、神の「隠された奥義」として

の事柄です。しかもその奥義は、神が御子キリストによって、キリストを通して、キリストのためになそうと定めている事柄です。これが「光」のことばで言い表わされているのです。エペソ書 1 章のテキストには「光」という語彙は一度も使われていませんが、そこには創世記 1 章 3 節の「光」について語っているのです。使徒パウロがエペソの教会に対して「神のご計画の全体を、余すところなく」知らせた(使徒 20:27)というその内容は、まさに創世記 1 章 3 節の「光」(אור)についての注解と言えるのです。そして、このことを余すところなく理解して語るためにも、使徒パウロが経験したように、「天からの光」、つまり、啓示(悟り、知恵)の光が必要なのです。「天からの光」による啓示によってはじめて、サウロ(=「シャーウル」**שאול**)は「神を熱心に尋ね求める者」のヘブル的な意味)が真のサウロとなったのです。そのことによって彼は「余すところなく御国の福音を語る」ことができたのです。

●使徒パウロはエペソの聖徒たちに「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(5:8)と語っています。ここでの「光の子ども」とは、「明るく、元気で、生き活きと」という意味ではありません。「**光の子ども**」とは、**やみの中から輝き出された光、すなわち、神の永遠のご計画(みこころ、みむね、目的)を悟った者**のことなのです。それゆえ、私たちは主にある「光の子」であることを自覚し、その意味するところを深く悟り、それにふさわしく歩んで、パウロのように「光」についてあかしする(論証する)力が与えられるべきであると教えられているように思われます。

## ベアハリート

●ユダヤ人の修辞法として、ある一つの言葉を別のことばに言い換えて表現するという「パラレリズム」(並行法)というものがあります。詩篇の中にこのパラレリズムがあることが発見され、その重要性に気づいたのは、18 世紀半ばになってからのことだと言われます。しかもこの「パラレリズム」は単なる文節だけに見られる域を越えて、旧約思想の本質を提示するための不可欠な修辞法だということです。旧約のみならず、新約聖書にあるユダヤ人が書いた福音書、そして手紙の中にもその修辞法が用いられているのですが、特に、使徒パウロの手紙はそれが顕著です。先ほどの創世記 1 章 3 節の「ゲネーセトオー・フォース」(光あれ)を、「エク・スコトゥース・フォース・ラムプセイ」(やみから光が輝き出よ)と言い換えていることにもそれがうかがえます。使徒パウロはこの「言い換え」(パラレリズム)の達人とも言えます。この修辞法は事柄の本質をよく理解した者でなければできない技法なのかもしれません。

●「光がやみの中から輝くように」と呼び出された神の目的は、「光」と「やみ」とを明確に**区別**することでした。しかも神は、その区別を「よしとされた」ということが創世記 1 章で強調されています。神はなにゆえに「よしとされた」のでしょうか。それについては、次回で取り上げたいと思います。